様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　４月３０日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７２０１８６
研究課題名（和文）　文献史料および出土文字史料よりみた漢魏交替期の国家支配と地域社会

研究課題名（英文）　Relationship between National rule and local communities during the *Han* and *Wu* dynasties

研究代表者
阿部　幸信（ABE　YUKINOBU）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：６０３４６７３１

研究成果の概要（和文）：
本研究は、漢代から三国時代にかけての諸典籍と、湖南省長沙市出土の三国呉簡を主な素材としつつ､漢魏晋期における国家支配と地域社会の関係を究明することを目指したものである。結果、三国呉においては地域の実情に根ざした独自の制度展開がみられたこと、その背景として前漢末以降地域社会の自律性に依存しその独自性を尊重する支配体制が存在していたこと、が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed to look into the relationship between National rule and local communities during Han and Wu dynasty by maximum utilization of classical books written in the same age and *Changsha Zoumalou Wujian*. In the end I made it clear that the *Wu* dynasty's ruling style which prized autonomy of local communities' was a inheritance from the *Han* dynasty's style.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：長沙呉簡、孫呉、戸調、漢、国家支配、地域社会、内外観、対匈奴関係

１．研究開始当初の背景
戦国諸国がひとつにまとめられた秦漢時代をいわゆる「中国」の萌芽期とみなし、その「統一」の諸相を議論することは、目下、本邦における秦漢史研究のトレンドとなっている。しかし、そこで扱われるのは主に思想・文字などの文化的事象であることが多く、政治・経済面からのアプローチは盛んとは言い難い状況にある。しかし、近年の環境史・地域史への関心の高まりは、制度や文化的指標の共有のみをもって何らかの統一体の形成・存在を主張するような観方を拒むようになっ

たのであり、秦漢帝国出現のの歴史的意義を再評価し、さらには中国古代史研究の有意性をアピールしていくうえでも、秦・漢の国家、就中長期安定政権となって後代に大きな影響を与えた漢朝と、その内部の諸地域との関係を具体的に把握しなおすことが、いまや焦眉の課題となっている。

報告者は以前より、政治的統一が文化的統一を招いた（あるいはその逆）というような単純な理解を脱し、『尚書』『礼記』『周礼』などにみえる儒家の理想的国家像がイデオロギー面での統一と多様な地域文化の同時並行的分立とを表裏一体のものとして描いていることを根拠に、漢朝全体の「統一」と内部空間における「分立」の関係について考察する必要性を強調し、制度・思想面を主対象とした分析作業を重ね、その結果、政治的統一を再生産するために必要なイデオロギー面での統一と、現実の支配を円滑に行うための社会的・経済的な分立とが相互に補完しあって漢朝が維持されていたことを主張してきた。このうち「社会的・経済的な分立」についての考究はいまだ充分ではないが、これは報告者個人の問題というより、この四半世紀における我が国の中国古代史研究全体が社会経済史への関心を大きく後退させていることの帰結である。こうした事態の出来は、戦後華やかであった唯物史観への反動を主因としたものであるが、その結果として、最近の中国古代史研究の対象が「制度・文化」「環境・地域」に二極分化し、研究者相互の、あるいは研究史との、対話が成り立ちにくくなっていることは、まことに憂慮すべき状況といわねばならない。そもそも、社会経済史的研究ばかりが歴史研究ではないというのであれば、歴史の中で社会・経済がはたしてきた役割についていま一度考え直さなければならないのであり、それを等閑視する斯界の傾向は、個別研究の場においても、日本の研究の問題点として海外の学者から指摘されるようにすらなってきている（例えば、王素「中日長沙呉簡研究述評」［長沙呉簡国際シンポジウム「長沙呉簡の世界―三国志を越えて―」報告、2006年9月17日、於お茶の水女子大学］など）。

本研究が国家と地域社会との政治的・制度的関係を環境史・地域史の観点を重視しながら問い直そうとするのは、上述のような本邦の学界のトレンドと「二極分化」とがもたらした成果を受けてのことであるが、その際に経済的・社会的視点に立ち返ることを強く意識するのは、本邦の学界の国際的立場と戦後歴史学の批判的継承とを意識することで、「二極分化」の負の部分を補おうとするからである。そして、そのようにして漢朝の歴史的役割を見極め、「中国」の形成過程とその性格の一部を見通そうとするところにこそ、本研究の意義はある。

２．研究の目的

文献史料ならびに中国湖南省長沙市出土の三国呉時代の簡牘群（以下「長沙呉簡」と略称する）を主な手がかりとして、後漢末～三国初期（いわゆる「漢魏交替期」）の長沙一帯における地域社会のありようについて考察し、それが古代国家の広域支配システムにおいて占めていた位置・役割の一端を明らかにする。さらにそのうえで、後漢と孫呉の地域支配の性格を比較検討し、両政権の広域支配システムの相似点を把握することにより、孫呉政権そのものよりもむしろ、漢朝が実現・維持した「統一」の歴史的意義・性格――漢王朝は、いったい何をどう「統一」し、あるいはしなかったのか。そしてそのことが、後の歴史展開にどのような影響を与えたのか――を論じてゆくことが、本研究の目的である。

従って、「漢魏交替期の国家支配と地域社会」という主題は、漢朝の「統一」のありようを分析するための手がかりのひとつとして設定されているものにすぎない。実際の研究遂行においては、必ずしも漢魏交替期に限定せず、漢魏晋期における国家支配と地域社会との相互関係、ならびに漢朝の「統一」の実態を広く捉え直すことが求められる。

３．研究の方法

本研究は、出土文字史料・文献史料の一方に偏らない、並行的・双方向的利用を方法的特色とする。よって以下では、各年度にとられた研究の方法について、出土文字史料研究・文献資料研究に分けながら略述する。

なお、長沙呉簡は総数10数万点にも及び、その全貌は申請時はもとより、本研究が終了した現時点においてもいまだ明らかでない。ゆえに、各年度における具体的な研究の方法・成果が、長沙呉簡の整理・公表の進行状況に大きく左右されたことを、あらかじめ断っておく。

(1) 2007年度

従来、正統観の問題やそれに起因する史料上の制約から、漢晋間の制度の継承・展開については、王権の継承関係と同様に、漢―魏―西晋という流れを重視する傾向が強かった。その結果として、漢魏交替期の江南の社会・経済がもっていた普遍性や特殊性についても、それについて考えることの重要性が指摘されながらも、研究の深化には自ずと限界があった。が、地域社会・経済と密接に関わる徴発・物流に関しては、孫呉と東晋との地域的連続性により注目する必要がある。

そこで、研究初年度においては、漢・魏の制度と比較可能でかつ江南の社会・経済の状況と密着した制度として、長沙呉簡中にみえる「調布」「調皮」に着目し、詳細な検討を

行った。
①出土文字史料研究
　当該年度に整理結果を参照可能であった長沙呉簡は、田地面積と作柄判定に基づく田地の占有者に対する課税について記した賦税類大木簡（走馬楼簡牘整理組編著『長沙走馬楼三国呉簡　嘉禾吏民田家莂』上・下、文物出版社、1999 年）と、雑多な内容をもつ小型竹簡の一部（同整理組編著『長沙走馬楼三国呉簡　竹簡［壱］』上・中・下、文物出版社、2003 年、および同整理組編著『長沙走馬楼三国呉簡　竹簡［弐］』上・中・下、文物出版社、2006 年）に限られていた。これらを参照しつつ、漢魏交替期の長沙一帯における地域社会の諸様相について基本的な知見を得ることを目指した。とりわけ「調布」「調皮」に関する記載をもつ小型竹簡については、写真版の詳細な検討をも含めた綿密なデータ収集を行い、その成果をデータベース化して、必要な情報を適宜引き出せるようにした。
②文献史料研究
　主に『後漢書』『三国志』にみえる「調」関連の記述を集め、考察を加えた。とくに『三国志』に関しては、『魏志』『呉志』だけでなく『蜀志』の記載にも留意することで、魏のそれとは異なった制度の存在可能性や、そうした制度の性格について考える際のヒントを得ることを目論んだ。
③その他
　本研究の内容と関係の深い内容の報告が行われた九州史学会大会（福岡・12 月）・公開シンポジウム「簡牘の世界」（新潟・3 月）・瀬戸内魏晋南北朝史研究会（岡山・3 月）において、斯界の最新成果を収集し、漢魏交替期における江南の社会・経済を出土文字史料を用いつつ考察するうえでの留意点を明確化することに努めた。

(2) 2008 年度
　この段階で、申請時に期待されていた長沙呉簡の公表計画に大幅な遅延が生ずることが明らかになったため、新たな材料が増加せずとも確実な成果を得られる方法を模索した。結果、従来の方法に加え、漢朝の国家支配と地域社会の関係を明らかにする別の切り口として、前漢時代における国家支配の性格の変化と、それに地域性が与えた具体的影響の究明にも取り組むこととした。
①出土文字史料研究
　当該年度中に、走馬楼簡牘整理組編著『長沙走馬楼三国呉簡　竹簡［参］』上・中・下（文物出版社、2008 年）の公表をみた。しかし、前年度に主に扱った「調布」「調皮」に関する記載は『竹簡参』中には存在しなかったため、嘉禾吏民田家莂ならびに『竹簡壱』『竹簡弐』の分析作業を継続した。とくに力点をおいたのは、「調」の性格のさらなる追究、民戸の規模・構成と実際の居住形態の検討、「丘」における水利の問題に対する初歩的考察、の 3 点である。
　漢代における国家支配と地域性の再検討に関しては、印章・封泥、とりわけ諸侯王印・異民族王印と諸侯王国自製の公印を中心に考察した。
②文献史料研究
　『後漢書』『後漢紀』『三国志』等の典籍に基づき、長沙の地政学的位置づけについて考察した。漢魏交替期に関する文献史料の包括的な検討は、当該年度をもって終了した。同時に、『史記』『漢書』と併せ、これまで歴史学の立場からアプローチされることの少なかった賈誼『新書』を積極的に活用することで、前漢初期における国家支配の性格や、そこで地域性が果たしていた役割に対し、新しい角度から光を当てることを試みた。
③その他
　日本秦漢史学会大会（松山・8 月）・「第二届中国中古史中日青年学者聯誼会」（北京・8 月）・九州史学会大会（福岡・12 月）において、本研究を遂行するために必要な最新情報を収集した。

(3) 2009 年度
①出土文字史料研究
　『竹簡肆』以降の公表遅延が決定的になったため、既公表分の簡牘に対する検討を継続した。1 人当たりの調布の賦課額に関する考察、長沙一帯の地形および田地の存在形態と作柄の関係に水利施設が及ぼした影響の想定、の 2 点がその中心であった。
　漢代については、張家山漢墓竹簡や尹湾漢墓木牘などを文献史料研究に援用した。
②文献史料研究
　『後漢書』『後漢紀』『三国志』については、個別具体的な問題に即して適宜参照した。主として利用したのは『史記』『漢書』『新書』であり、それによって漢代における支配集団の変遷・変質の過程を跡づけることをとおして、国家支配と地域性・地域社会との関係を巨視的に捉え直そうと試みた。

４．研究成果
(1) 2007 年度
　「調布」「調皮」に関する検討をとおして、孫呉の「調」は地域社会における物流調整を担う制度であったことが明らかになった。これは、漢代における臨時徴発型の「調」が魏・西晋に至って定制化された「戸調」に変化したという、従来明らかになっていた流れとは別に、孫呉独自の制度的展開が存在していた可能性を示すものとして、重要な意味をもつ成果である。その詳細は、『立正史学』誌上において論文の形で公開した。
　また、近年の日本における前漢末～漢魏交

替期に関する研究動向について、「中国中古史中日青年学者聯誼会」（北京・8 月）において報告を行った。

(2)2008 年度

長沙呉簡の分析の結果、民戸の規模については布の徴収額から、調の性格については納入簡の記載様式から、水利については賦税類大木簡から得られるデータと『竹簡参』にみえる水利施設の規模との照合から、それぞれ検討の手がかりを得られることが判明した。

漢代に関しては、とくに前漢時代の支配秩序の変化について、定説と異なる新たな知見が得られた。漢初の漢皇帝は、支配階層を構成する者たちの共通の利益、すなわち「天下を共有する体制」を体現し護持する存在であったが、漢皇帝の支配領域はあくまでもその直轄領域内にとどまり、旧東方六国地域に分立していた諸侯王国は、漢からみて「外国」と位置づけられていた。しかし、武帝期の対匈奴戦争によって「天下の防衛」が至上命題となると、「天下を共有する体制」は相対的に軽視されるようになり、やがて諸侯王国は漢の国内に取りこまれて、漢朝が「天下一統」を成し遂げた。そののち前漢末に至って、漢朝による地域性を超えた統一的支配が匈奴との対比の中で固有のイメージを獲得するようになると、漢朝にとっての「内」と「外」の差がより強く意識されることとなり、その反映として、異民族印に「他」を明示する象徴（同音の「駝［ラクダ］」や「蛇」）を象ったつまみを付加する制度が生み出されたのであった。如上の観方は、漢がその建国当初から「郡国制」という体制に基づき秦帝国の旧領に支配力を行使していた、という人口に膾炙した説明に疑問を投げかけるものである。こうした成果は、『日本秦漢史学会会報』『中國史學』の両誌上に論文として、また白東史学会大会（東京・12 月）で口頭報告として、それぞれ報告された。

(3)2009 年度

年度途中、長沙呉簡の整理・公表の計画に根本的な見直しが加えられているとの情報に接したため、長沙呉簡に関する検討についてはいたずらに結論を急がず、データの整理を優先させることとした。一方、漢代における国家支配と地域社会の関係については、一段の進展がみられた。その大綱は、下記のとおりである。

①漢朝の影響力が直轄領域内に限定されていた漢初においては、漢の建国に関与した淮北集団が「統治集団」を構成していた。彼らは任侠的な淮北の地域的メンタリティを特徴とし、それが支配者との人的結合に強く依存する独特の勢力基盤を生み、また無為を尊ぶ気風は漢初の国家秩序・天下秩序のゆるやかさに影響を与えてもいた。ところが文帝の即位に伴い、北方の情勢を知悉しかつ東方と先鋭的に対立する理由をもつ代国のスタッフが漢に流入し、対匈奴政策・対諸侯王政策の重要度が増大すると、次第に汎地域的な価値観が求められるようになり、それに基づいた人為的秩序を国家機構のうちに導入しようとする動きもみられるようになった。

②景帝期から武帝期にかけて漢朝が諸侯王国の人事権を掌握する過程で、深刻な人材不足状況が発生したが、これを補ったのは対匈奴戦争によって生じた軍功者や買官者たちであった。こうして、「一統」された汎地域的な「天下」を匈奴から防衛するという新たな「功」を有し、かつ地域性をもたない新分子が、漢朝の国家機構内へと大量に入りこんだ。漢朝の支配領域の拡大と国家機構スタッフの人的構成の変化は、特定の出自や地域性に依存する者たちが自律的な集団や階層を構成することを阻み、結果として君権が台頭することになった。

③武帝による「一統」は、次の時代に 2 つの課題を残した。ひとつは「一統」の外部に残された「夷狄」との対峙状況をイデオロギー化することであり、いまひとつは山東を支配下に入れたことによって抱えこんだ多様な地域性を「一統」のグランドデザインのうちに位置づけ直すことである。如上の趨勢を承けて、前漢末、漢朝は「内臣 - 外臣構造」によって自己と「他」とを峻別する論理を制度化し、わけても別格の「他」であった匈奴に対する他者意識に基づきながら、「一統」全体の文化的特徴を定義するに至った。三皇説にあらわれる階層的秩序・農業・熟食といった諸要素はその典型例で、そこからとくに階層的秩序と農業とを抽出し軸にすえる形で行われたのが、三老の教化内容の変化や州の実体化・「封建擬制」導入に代表される前漢末の諸制度改革である。そこでは漢朝の自己意識の一端が制度的に強調されると同時に、国家が主導する形で漢朝内部の多様性を維持・再生産するしくみが確保されており、その結果として漢朝は、世界性を帯びた帝国として粉飾されていたのである。

④前漢末の諸制度改革の一環として成帝綏和元年に実施された綬制改革により、国家機構のうちに新たな「統治階級」が出現した。この階級は皇帝の信任を受けた者のみによって構成され、これに加わるためにはすでにメンバーとなっている者に招かれるしか方法がなかった。また、彼らは特定の地域性とは無縁の没地域性的存在であり、何らかの功を有することも参加資格とはみなされなかったから、自律的に秩序を形成する論理をもたなかったが、それに対しては古制に則った位階序列が国家によって用意され、これに基づいた内部秩序の他律的再構成が行われた。

と同時に、古制が理想とする理想的な統治形態である封建制に合わせて官僚制を読み替えるという要請に応えつつ、現実の政治課題に合わせて各地域の実情に柔軟に対応できる体制を創出する目的から、官府の長の自立性を容認しながら官府内の秩序を国家が他律的に規制する「封建擬制」が導入され、「統治階級」のコントロールがはかられていった。

以上の成果は、『早期中國史研究』誌所掲の論文、および「中国歴史上的統治階級」研討会（台北・6 月）・「第三届中国中古史青年学者聯誼会」（武漢・8 月）・日本秦漢史学会大会（静岡・10 月）の口頭報告において報告された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①阿部幸信、「武帝期・前漢末における国家秩序の再編と対匈奴関係」、『早期中國史研究』、第 1 号、155-194 ページ、2009 年、査読あり
②阿部幸信、「長沙走馬楼呉簡所見調納入簡初探」、『立正史学』、第 103 号、31-50 ページ、2008 年、査読なし
③阿部幸信、「漢初「郡国制」再考」、『日本秦漢史学会会報』、第 9 号、53-80 ページ、2008 年、査読なし
④阿部幸信、「前漢時代における内外観の変遷―印制の視点から―」、『中國史學』、第 18 号、121-140 ページ、2008 年、査読なし

〔学会発表〕（計５件）
①阿部幸信、「「統治システム」論の射程」、日本秦漢史学会第 21 回大会、2009 年 10 月 24 日、静岡大学人文学部（静岡県）
②阿部幸信、「漢朝的国家秩序与対匈奴関系―以武帝期与西漢末為中心」、第三届中国中古史青年学者聯誼会、2009 年 8 月 28 日、武漢大学珞珈山荘（中国）
③阿部幸信、「論漢朝的『統治階級』―以成帝綏和元年改制為中心」、「中国歴史上的統治階級」研討会、2009 年 6 月 13 日、台湾大学歴史学系（台湾）

６．研究組織
(1)研究代表者
阿部　幸信（ABE YUKIONOBU）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：60346731